

# 水と炎

## 第四卷

東京小町

## 主な登場人物・国

### □ナジャ家□

■キト・ナジャ ■レアレス公国の国境付近、元はハットカバス自治区だったカトロス出身の少年。炎の神・カーミラの術者。肌は褐色、髪は黒、碧眼。

■シロウ・ナジャ ■キトの父親。元は大工だったが、生活のために鉱山の仕事を始めた為、鉱山特有の肺病にかかってしまう。肌は褐色、髪と目は黒。

### □レジストン家□

■カルーア・レジストン ■レアレス公国において最も巨大な企業、レジストン財団の御曹司。生まれつき水の神・ウオーラの術者。肌は白、金髪、碧眼。父親の意向で、十八歳未満だが術法研究所でボランティアをしている。

■カンパリ・レジストン ■カルーアの祖父。レジストン財団の会長。若い頃神学を専門に勉強していたので、神に詳しい。カルーアの能力をいち早く見抜いた。カルーアの数少ない理解者。

■カシス・レジストン ■カルーアの父にしてレジストン財団の社長。丸八年息子と顔を合わせていない。

■マドラー・シングルトン ■カルーア付きの秘書。マーシャルアーツ（格闘技）に長けている。

□術法研究所

■リンダ・ウインダム ■術法研究所所長。緑の神オアーの術者。肌は白、髪はブルネット、碧眼。

■ミリー・マリアノ ■術法研究所に所属する術者。紙の神ピルスーリの術者。リンダの親友でもある。肌は白、髪は紫（染めている）、碧眼。

■ドクター・クリスプ ■ハットカバス王国出身の術法研究所付きの医者。雷の神ラージの術者。肌は白、髪と目は黒。

□その他

■ヘイケイ ■レアレスの都市、カンビューラの市長。

■トツポリ ■ヘイケイの部下。神の伝説を伝える口伝（こうでん）でもある。

□国・地域

■レアレス公国 ■民主主義制度の、世界に対しても強い影響力を持つ大国。軍隊を持ち、近隣のハットカバス王国とは歴史上何度も戦争をしている。

■ハットカバス王国 ■レアレス公国の南方に位置する軍事国家。代々術者を輩出する血筋のハットカバス一家が支配している。

■ハットカバス自治区 ■ハットカバスが自治を認めている地区。

## 前巻までのあらすじ

レアレス公国の田舎に住む少年、キト・ナジャは父親シロウの病気を治すために、首都であるレストンに列車でやってくる。キトは炎の神カーミラに守られる「術者」だった。その力を使ってボランティアをする見返りに、シロウの治療をするという取引を少年は国と行ったのだ。シロウは無事入院し、キトは国が斡旋してくれた養母・サクラの家で暮らすことになる。そして首都の子供の義務である学校にも通わなければならなかった。

同じ学校でキトは水の神の術者、カルーア・レジストンに出会う。女神同士はすぐに打ち解け合うのだが、キトとカルーアはいまいちだった。それを見たフィクサー率いるガキ大将軍団は人気のないところにキトを連れて行って集団リンチを行う。

そこに現れたのは、カルーアだった。フィクサー達はカルーア的能力を知っていたのですぐに謝ったのだが、にも関わらず、カルーアは呪文を唱えてフィクサーを水球の中に閉じ込めたのだった。「彼は僕と同じ」というカルーアの言葉にカッと化したキトはカルーアを殴りつけ、「お前と一緒にするな！」というのだった。二人の関係はぎくしゃくする一方だった。

そんな折、いよいよ術法研究所でキトが神の能力を披露する時が来た。だが呪文を唱えて大きな炎を発生させたキトは、大声で叫び、制御不能に陥ってしまう。炎はなんとか収めたが、困り果てる術法研究所の面々。しかしそこでカーミラが、キトは今まで呪文を使ったことがな

いのだという衝撃の事実を明らかにする。

ピンと来たドクター・クリスプはキトの父親が入院している病院へ向かった。そして、キトのカーミラは今亡き母親から受け継いだものではないかと問う。

ドクターの読みは当たった。キトのカーミラは母親から受け継いだものだった。だが真実はもっと壮絶だった。故郷に帰った際にシロウが幼馴染と浮気してしまったことを知ったキトの母は、自らの能力で焼身自殺してしまったのだ…

そして術者が死んでしまった神は、転生を迎え、二歳のキトを守るようになったのだ。

呪文を唱えた後気絶したために病院に運ばれるキト。父親と同じ病室で、キトは前代のカーミラと母のことを明かされる。しかし何と言ってもいいか分からず、親子は隣通しのベッドで背を向け合うのだった。

後日、術法研究所を訪れるキト。カーミラは実体として呼び出して、連れてこなかった。そしてリンダと話をする。リンダは、本来ボランティアとは自分のために行うものなのだ、と説く。そして、できるだけカルーアに協力してもらった方がいいと言う。キトもそれは十分に感じていた。

一方、一日の用事が終わったカルーアは車で家路につこうとしていた。マドラーが「何かやりたいことをする時間があるのもいいのではないのでしょうか」というと、カルーアは「キトと友達になりたいかな…」と答えるのだった。

一方キトは、やはり自分の能力をうまく使いこなせるようになるにはカルーアの協力が必要だと悟り、カルーアの家であるレジストン財団を訪ねる。広大な敷地のどこから入っていいかわからないでいるキトに、ケープを被った人物が話しかけてくる。「命が惜しいなら、ここから逃げた方がいい」と。

嫌な予感がしたキトは、実体と呼び出して屋敷を偵察しに行ったカーミラに戻って来いと言う。

その直後、レアレス公園を巨大な地震が襲った。

カーミラのお陰で上空に逃れ、キトは無事だった。レジストン財団の屋敷は崩壊してしまい、一度はカルーアを探そうとするものの、家にはない可能性を考えてキトは術法研究所に向かう。術法研究所は、建物の倒壊こそ免れたものの、負傷者などが多数出ていた。能力を使ってその手伝いをしているカルーアを見つけてキトはほっとする。カルーアとキトは物神を実体として呼び出して、行方不明のマリアノの捜索をすることにした。図書館で何とかマリアノを救出できた二人。マリアノは、急いで自分達の家族の安否を確認して来いと言う。

キトはまず、サクラの家に行った。物の下敷きになっていたものの、サクラは怪我もなく無事だった。そして病院にいる筈のシロウを探すために病院に行こうとするキトに、カーミラは難色を示す。結局病院についてキトとカーミラだったが、シロウが見つけられない。キトはおりあえずできることを優先しようと、炎の呪文を使ってあちこちを手伝う。次の日、キトの前に無事なシロウが現れた。

レジストン財団に行くと、カルーアが祖父が見つからないと言って泣いていたのだった…

## 神と術者について

・自然物、人工物などを司る。見た目は全て女性で、姿は様々。「神」「女神」「物神（ものがみ）」とも呼ばれる。

・物神は特定の人間について、その人間を守る。守られている人間を「術者」という。

・術者は物神の力を「呪文」を唱えることによって使うことができる。呪文は神によって違う。物神は通常、うつすらとした姿（幻影）となっていて、術者以外の人間にはその姿を見ることはできない。また、術者と五十メートル以上離れることはできない。（実体は無制限となり、遠隔で術者と物神で会話が可能となる）

・物神の幻影は天然の宝石を身につけることで消すことができる。しかしその場合、その術者は呪文を使うことができなくなる上、他人の物神も見えなくなってしまう。

・術者は物神を実体として呼び出すことができる。そうすると、術者ではない者にも神の姿が見えるようになる。術者は呪文を使えなくなるが、神が直接能力を行使できる。

・術者が物神を実体として呼び出すと、身体がうつすらと光り、術者だけにはそれが見える。

・物神は術者が死ぬまで術者についている。術者が死ぬと、転生を迎え、別の術者につくようになる。転生後の物神は転生前の記憶を持たない上、見た目などもまるで違う場合もある。

・物神と術者（男性のみ）の間に生まれた者を「精霊」という。人間の二倍の寿命を持ち、呪文を詠唱しなくとも神の力を行使することができる。術者同様、他の物神の幻影を見ることができ。術者が死んでも、精霊の能力はなくなるらない。

・物神には序列がある。例えば、太陽の神は炎の神の上級神、海の神は水の神の下級神である。

## 第四章 旅立ち

— 1 —

レアレス公国で、災害の救助及び支援活動を行ったのは以下の機関だった。

- ・ 保安庁（いわゆる警察）
- ・ 正規軍
- ・ 術法庁

これらの機関は互いが互いを監視するシステムになっているため、決して風通しがいいとは言えなかったが、非常時故にそこは目をつぶるしかなかった。何より目的が同じなのだから、監視するも何もなかった。

このうちのひとつの機関である保安庁のとある建物の中で、ある会議が行われていた。キトとカルーアが丁度会えた日、地震の翌日ということになる。

出席者は軍の長たる将軍から、大佐クラスまでの軍人と、国の研究機関の研究者、そして術法庁及び術法研究所の者たちだった。

勿論、リンダ・ウインダムも術法研究所所長としてこの会議には参加していた。



この会議は非常に緊急で召集されたものだったが、国家機密扱いということで速やかに召集された。参加者の誰もが、本来の救助・支援活動の手を止めてまでやってきたのだ。「では、地質学者のラケル・ローバー氏から今回の地震についての見解をお話いただきます」

司会を務めているのは、保安庁副長官だった。本人が壇上にいるため今は空席となつて、いるその副長官の隣の席に座っていた中年の男性が、すばやく壇上に上がり話し始めた。

「みなさんお忙しい事でしょうから、簡潔にお話いたします」

ローバーは低いバリトンで話し始めた。

「レアレスでは定点的に地震を観測する機械を配置しています。急いでデータを集めたところ、実に奇妙な点が見つかりました」

会場はにわかに、少々ざわめいた。

「本来起こる地震というものには、前後に『余震』と呼ばれる小さな地震が断続的に起こることが確認されており、それに例外はありません。ですが、今回観測されたデータでは前後に一切余震は起こっていません。それは皆さんも実感されていることかと思えます」

ローバーは一端言葉を切つて、少し間を開けた。

「私が考える可能性は、この地震は人為的なもの、つまり術者の能力によって引き起こされたのではないか、ということですが、…そういった能力を持つ術者がいるのかどうか、私には分かりかねますので、後は術法研究所の方にお任せ致します」

ローバーは上がった時と同じように、軽やかに壇を降りて席に戻った。代わりに先程の保安庁副長官が壇上に戻り、

「術法研究所所長、リンダ・ウインダム氏、よろしいですか？」

と言った。リンダは

「はい」

と小さな声で返事をする、壇上に上がり、保安庁副長官から演説台を任せられた。

保安庁副館長は席に戻り、リンダに質問した。

「先程のローバー氏の話をどう思いますか？」

「実は、地震が起こる直前に不審な人物がいたとの目撃情報を得ています。その人物は、『命が惜しかったら、ここから立ち去った方がいい』と言ったそうです」

会場がざわめいた。なかなかおさまらなかったのも、保安庁副長官はギャボル（木槌）を何度か打ちつけた。やつとのことでは会場が静かになつたので、保安庁副長官は聞いた。

「地震を引き起こす事ができる神や術者というのは、今この国に存在しているのでしょうか？」

「まず、この国に元々いるかという質問に対しては、いません。術法研究所には登録がありません。ただ、過去の文献から、地震を引き起こせる能力を持つ神が存在したという証拠はあります」

リンダは一端言葉を切って、ふう、と溜息をついた。壇上に上がって喋ることは緊張もす

るし、疲れることなのだ。

「その神とは？」

保安庁副長官がたまらず聞いてきた。

「まず五大神に類される土の神ジオーナ。それから全ての神の頂点に立つ、地球の神アルス」

「またもや会場はざわめいた。「全ての神の頂点に立つ神」の存在など前代未聞だからだろう。しかし術法研究所内においてはさほど知られていない話でもなかった。アルスの所業は文献にも残されているが、「別の意味で」それは人の興味を引くものだったからだ。

「それらの神の術者が登録されていないとすると、この国にいるのに登録されていないか、他の国からやってきたかのどちらかということになりますね？」

保安庁副長官の問いにリンダは

「そうです」

と答えた。

「見つけ出す手立ては、あるのでしょうか」

保安庁副長官は不安そうな口調で聞いた。

「ないこともないです。ただ、可能性としては高いとは言えません」

「今度は会場が溜息で満たされた。リンダも溜息をつきたい気分だったが、こればかりは本当にしようがないことなのだ。」

「可能性は低くとも、賭けてみる価値はおありと考えますか？」

リンダはしばらく黙った。会議場の全員が、それに注目していた。

「あると思います。見つけ出す事は重要だと思っています。隣国から来た者であるとすれば、宣戦布告の可能性も否めませんから」

会場はざわつくことはなく、今度は水を打ったような静寂に包まれた。誰もが緊迫感を抱いたのだろう。

「術法研究所から調査隊を派遣し、すみやかに原因の術者を探し出すように努力致します」  
「了解しました。所長、ありがとうございます。各関係機関も、術者に関する情報は速

やかに術法庁へ連携するようお願い致します」

リンダは壇上から降りて、席に戻ってきた。

「誰をハットカバス本国に派遣するの？」

隣の席のマリアノが小さな声で聞いてきた。

「お医者さんと、御曹司と、期待の新人」

それを聞いてマリアノはほう、という顔をしただけで、後は何も言わなかった。

会議は次に軍事関係の話題に移った。直接関係ないからといって聞かないわけにいかない。リンダとマリアノは事前に配られる資料を見ながら、今度は軍の関係者からの報告を聞くことになった。

後日呼び出されたのは、キト、カルーア、ドクター・クリスピの三人だった。

だがカルーアは約束の時間に30分も遅れた上、黙って暗い顔をして言い訳もなかった。しかし、リンダはそのことについては言及しなかった。

三人は「植物園」、リンダの部屋にいた。

「単刀直入に言います。今回のこの地震について、引き起こした術者を探して欲しいのです」

「えっ!？」

声を出したのはキトだけだった。ドクター・クリスピは一度瞬きをしただけだった。

「リンダ、三方会議では、そういう結論になったのですか」

「地質学の研究者が、これは人為的に起こされた地震であると証言をしました。それにキトが見たという謎の人物のこともあります」

キトはあのフードの人物を思い出していた。逃げた方がいい、と自分に忠告をしたあの人物を。

やはり、あいつなのか。

「そして、哀しいことですが、この地震の震源地はレジストン財団の敷地内です」

今度ばかりはキトは驚かなかった。

だがドクター・クリスは

「まさか…企業テロを？」

と言った。

「レジストン財団の敷地といっても、会社の敷地ではなくて一族の住居の敷地です。犯人の目的は、分かりませんけれど」

キトは心配になってカルーアの方を見た。うつろな目で、話を聞いているのかいないのか、下の芝生の床を見つめているだけだ。

「キトが出会った不審人物も一応国内で指名手配されることになりました」

「で、我々はまずどこに行けばよいのですか」

ドクター・クリスが聞いた。

「ハットカバス王国へ行ってもらいたいです」

「ハットカバスへ？」

故郷といえど、ドクターには余程予想外の発言だったらしい。

「ええ。裏社会に通じる人物に会って来て貰いたいの」

「国内で洗わない理由はどうしてですか？」

「少なくともこの国内では術者は全て登録されている。登録されていない術者を探すならば国外に出るしかないわ。それに、軍や保安部だってこの国にはあるのだから、ここにと

どまる理由はない筈です」

「そういうことですか」

リンダはずっとうつむいているカルーアの方を見て、言った。

「今はとてもそんな気になれないのは分かるけれど、あなたの強い力は必要なの。だから、協力して頂戴」

カルーアは微動だにしなかった。

「カルーア、分かった？」

やっとのことで、消え入りそうな声で

「はい……」

と言った。

リンダは再びドクター・クリスプの方を向いて話した。

「ハットカバスの首都シン・リックラーに行つて、ギルドシユアという人物に会つて欲しいの。彼ならば、アルスについて何か知っているとと思うの」

「アルス：確かに大規模な地震を起こせるのは地球の神をおいて他にないかもしれませんがね」

「地球の神？」

キトが口をはさんだ。

「ええ。この星を統べる神よ。この星では、すべての神の頂点に立つ神であるといっても

過言ではないわ」

「対抗できる神がいるとすれば、古い文献に残っている太陽の神エネルギーだけでしようね」  
ドクターは研究者らしい、見事な見解を述べた。

あのフードの者がアルスの術者だったとして、今はどこにいるのだろうか。

そもそも、レジストン財団の敷地をあれほどまでに破壊する理由は何だったのだろうか。  
いきなりハットカバス王国に行ったとして、あのフードの男が見つかるとは、キトには  
到底思えなかった。それよりは、国内の搜索に賭けた方がいいのではないだろうか。

とはいえ、それをどうやって探すかという術がキトには思いつかない。だから今は、リ  
ンダの言うことに従うほかなかった。

「出発は、いつにしますか」

「できるだけ早く」

リンダはたまに容赦ないことをさらりと言う。

「カルーア、キト、必要最低限の衣服だけ持ってきてください。他に必要なものは私が揃  
えます。準備が整ったら、再びここに集まりましょう」

「はい」

カルーアは、黙って力なくうなずいただけだった。

キトは早速家に戻ろうと、起き上がって歩き始めた。だがカルーアは微動だにしない。  
気になって後ろを見ながら歩いていると、ドクター・クリスプが「行け、行け」とキトを



追い払うように手を振った。

キトは走り始めた。歩くような、そんな悠長なことではいけないと思ったからだ。事態は動き出している。それに追いつけるように、走らなければ。

やっこのことでカルーアも帰り、部屋にはドクター・クリスプとリンダが残るのみとなった。ドクターはリンダに個人的に聞きたいことがあったのだ。だから残った。

ドクターは椅子から立ち上がり、リンダのついでに机の前に入った。リンダの碧眼が、その黒髪黒い瞳の眼鏡をした医者を探らえていた。

ドクター・クリスプがここにやってきたのは、今から丁度十年前のことだった。

まだ若い医師だったが、整形外科医として既に国内に名を知られていた。それは他でもない、呪文を使った電気治療の素晴らしい成果のおかげでもあった。

ドクター・クリスプは年下のリンダにも尊敬を持って接してくれた。この術法研究所の主治医になることを快く引き受けてくれたし、五大神の研究のために研究者にもなった。彼がやってきてから五年後、リンダは二十五歳の時に前代から引きついで所長となったが、その時にも助力してくれた。

もし彼が居なかったら、今の私はいなかっただろう、とリンダは本気で思う。

「聞きたいことがあります」

「何ですか？」

「人選についてです。私はこの医師でもありません。まだ怪我をした患者も残っています。

それを放り出して旅に出るよりは、元から術者探しに長けているマリアノ女史の方が適任だと思ふのだが」

ドクターの言うことはもつともで、非の打ちどころがなかった。

リンダは、ドクターから目を反らして机上の方を見始めた。何も言おうとはしない。ドクターは辛抱強く待った。

「何か言えない理由でも？」

リンダは深刻な表情をし、黙りこくってしまった。

それは言えない事情があるかないかとも言えないということを示してもいた。何の理由も教えては貰えないのか。ドクターはリンダに信頼されていないのかと思うと、少し気が沈んだ。

そしてドクターは、机の前を歩くと、リンダが座っている真横にやってきた。リンダは椅子から立ちあがった。

「私は信用ありませんか？」

「そういうわけではありません。ただ……」

「ただ？」

「いずれ必ずお話は致します。今は話す事ができません」  
ドクターも黙ってしまった。二人とも、何も言わない。

「そうですか……」

そう言うのと、ドクター・クリस्पはリンダの右手を丁寧にとると、自らの頬に擦り付けた。

「ドクター！」

リンダは慌てて、手を引つ込めようとしたが、同じタイミングでドクター・クリस्पが握った手に力を込めたのでかなわなかった。リンダの右手は、ドクター・クリस्पの左頬にあった。

「リンダ……」

「はい……」

「これからしばらく、貴女に会えないと思うとつらい」  
リンダはまたいつものおべんちやらが始まったと思い、言った。

「そんな大げさな……悲しい演技なんてやめてください」

「演技ではありませんよ……」

ドクター・クリस्पは握ったリンダの手のひらを頬から離し、手のひらを自分の顔に向けた。そしてそのままその手を、自らの顔に押し付けた。

「ドクター……」

またもリンダは抵抗を試みたが、それもやはりかなわなかった。ドクター・クリस्पの手こめられた力は相当なものだったが、リンダの手のひらにおしつけられた彼の唇は、実にやわらかかった。

「私は誰にでも軽口を叩くから、貴女は自分もその一部だと思っていたのでしょうか？」

リンダは何も言えなかった。ただ、抵抗するために込めていた手の力を抜いた。するとドクター・クリスは、今度はリンダの手の甲にキスをした。

「私は、貴女を愛しています。リンダ」

「わたしは…」

そこまで言ってリンダは口をつぐんだ。否定も肯定もできなかったからだ。

今やドクターの唇を、リンダは拒んでいなかった。

ドクターは丁寧に、手のあちこちに唇を滑らせた。

「できる限りのことはするつもりですが、もし、私に万が一のことがあった時は」

「やめて」

今度ばかりは、リンダは勢いよく手を引き抜いた。左手で右手を包んだ。

「その時は、きちんと次のラージの術者を探し出してください」

リンダはぐっと歯を噛み締めた。

こんなの、まったくフェアではない。

一方的に愛の告白をして、万が一戻らなかった時のことを言い含めて。

私の気持ちはどうなるの。

「わたしはっ」

リンダは強い口調で言いかけて、そこで止まった。

ドクター・クリスは次の言葉を待ち、黙った。

リンダも何も言わないまま、長い沈黙が訪れた。ドクター・クリスも言葉を求めるようなことも言わず、リンダもまた黙っていたため、双方長い間黙っていた。

リンダは、椅子に座ると机の方に向き直った。

「自分の下した判断が、間違っているとは思いません。だから、あなたが死ぬようなことはないし、この陰謀が明らかになると思っています。あなたにはそれだけの実力がある。カルーアにも、キトにも」

「はい」

「ケンジ：だから万が一などというのはやめて」

ドクター・クリスは名前と呼ばれて少なからずとも驚いたようだった。普段から表情に乏しい彼が、目を見開いてみせた。だが次の瞬間、ふっと溜息をついて

「分かりました」

と答えた。

「それからあなたが私をどう思っているか、ということですが」

ドクター・クリスはじっとリンダの目を見据えた。

「とても優秀なお医者様で、術者で、男だと思っています」

これは嘘偽りのない、リンダの正直な今の気持ちだった。分かってくれるとよいのだが。ドクター・クリスは薄く笑いかけ

「今は、それで十分です」  
と言った。

本島出版

ハットカバスへ行く準備ができたキトは術法研究所に向かった。サクラとシロウには、既に話はしてきた。どちらもかなり心配していたが、自分より経験のある術者が二人同行すると説明すると幾分か安心してくれた。本当に、ほんの幾分か、だが。

術法研究所の入り口には、馬を一頭従えた馬車があったので、すぐに分かった。馬の手綱は、ドクター・クリスが握っていた。

そして荷台には既にカルーアがいた。キトは少しほっとした。

しかし荷台のカルーアは膝をかかえて座り込み、目もうつらだった。

キトはわざと大きな声で

「遅くなりました！」

と言った。しかし、カルーアはこちらを見るでもなく、ぴくりとも動かなかった。ウォーラは、背中からおぶさるようにカルーアの首の前に手を回している。それでも、何をするでもなく黙っている。

「我々も、今しがた来たところなのですよ。丁度よかった」

ドクター・クリスは一度馬車から降りると、荷台の後ろの衝立を開けた。キトは持ってきた大きな袋をまずぶつと荷台に置き、次に自分がよじ登った。するとドクター・クリ



スプが衝立を閉めて固定した。

「もう行くの？」

術法研究所の入り口の方から、マリアノの声がした。ドクター・クリスプは

「全員揃いましたからね、そろそろ」

と言った。

「ちよつと待ってて。リンダ連れてくるから」

マリアノが建物の中に消えた。

キトは膝を抱えて座ったカルーアに話しかけた。

「カルーア、大丈夫か？」

カルーアは言葉にすることなく、軽くうなづいてみせた。

「本当かよ。気持ちには分かるけど、無理して行くことないんじゃないのか？」

カルーアはそこでやつと、キトの方に顔を向けた。

「ダメだよ。君の能力を抑えられるのは僕だけだ」

ズバリと確信を突かれ、キトは思わず動揺した。

「こっ、この数日で大分コントロールできるようになったんだぞっ」

初心者呼ばわりされるのは気に入らない。

「まだまだ訓練は必要だよ。僕だって、最初はそうだった」

びしやりといわれて、キトは口をつぐんだ。

その時だった。馬車に誰かが駆け寄ってきた。

「カルーア様！」

「マドラー……！」

カルーア付きの秘書のあの女性だ。ここまで全力疾走してきたらしく、膝を折ると、ぜいぜいと息を整え始めた。

カルーアは荷台をひざをついたまま歩いて、その端まで行った。

「何の用？」

「わたし、も、ごいっしょ、させて、いただ、きます」

カルーアは黙ったまま、何も言わない。

「カルーア、様、だけを、行かせられません」

術法研究所の入り口から、リンダとマリアンが出てきた。馬車に近づくと、マドラーの存在に気付いた。

「あなたは……？」

やっと呼吸が落ち着いてきたマドラーは、しゃんと背筋を伸ばして話した。

「私はカルーア様付きの召使をしておりますマドラー・シングルトンと申します。このたびのカルーア様の旅に同行させていただきます」

リンダとマリアンは顔を見合わせ、同時に曇らせた。

「あのう……この任務は、神に守られた者だからこそできることなのです。失礼ですが、術

者ではない方がご同行されても…」

「早い話、足手まといつてことよ」

マリアノがぴしゃりといった。

「レジストン財団からいくらかの金子を預かっています。旅の資金になるかと。それに、私はルーア様を幼少から守るボディガードも勤めています。少々の荒事など、取るに足らぬ話です」

次の瞬間、空を切る音がしてマリアノの両袖から刃物が現れた。柄のない短刀のようなものだ。マリアノは、それを自分の胸の前で交差させて、目の前の人達に見せつけた。

「他人を守るということは、当然自分も守れるということ…。問題ないでしょう」  
ドクター・クリスプが言った。

「ありがとうございます」

マリアノは、何と地面からジャンプして馬車の荷台に飛び乗った。確かに身体能力は高いようだ。

リンダとマリアノは荷台の子供二人と、運転席のドクター・クリスプを交互に見て  
「くれぐれも、気をつけてくださいね」

「ヤバいと思ったら逃げんのよ。それが生き残るコツよ」  
と、それぞれ言葉を発した。

「参考程度に聞いておきます」

ドクター・クリスはそう返事した。

「行きますよ」

荷台の二人に声をかけた。そしてドクターは、手綱を思い切り叩き付けた。

馬車が走り出す。

本来ハットカバス国に行くには列車が通っている。だがこの災害で復旧の目処が立たないため、国境まで馬車で向かうことにしたのだ。列車だと丸三日程度の距離だが、馬車だと二週間程度だとドクター・クリスはみている。そうして、そのための準備をしてきている。

極力人里離れた場所を通過することは避け、整備した道路を通るつもりではいるが、今回の災害で道もどうなっているか分からない。そこは臨機応変に行くしかないだろう。

リンダとマリアノは、馬車が見えなくなるまで見送っていた。

マリアノはタバコをくわえた。

「リンダ、あなたの思惑通りにいくと思うの？」

「行くと思うわ」

リンダは即答した。

「もし、本当にアルスの場所を探し当てちゃったら？」

「加わってもらえないでしようね」

マリアノはマッチでタバコに火をつけて、マッチを放った。煙を吐いて「なんとなく、気が進まないのよね。…こういうのは」と言った。

それは、術法研究所のツートップの二人しか知りえない事実だった。

「馬車って、結構揺れるんだな」

馬車初体験のキトは、動くなりびっくりして荷台の枠につかまった。

「乗馬はもつと揺れるよ。でもすごく楽しいんだ」

「カルーア、馬にのれんのか？」

「一応ね」

「今度、乗り方教えてくれよ」

「うーん、僕は人に教えられるほどうまくないよ」

「そんなの大丈夫だろ。自分ができることなら、教えられるだろ」

後ろの荷台の会話を聞き、ドクター・クリスは密かに安堵していた。

荷台で二人で黙っていられたら、とてもこの先やっていけない。カルーアは無理にでも立ち直る必要がある。

キトもまた、それが分かっているから積極的に話しかけているのだろう。学校にもろくに通っていないかったが、人間関係の重要なところはしっかり分かっている子供だ。親の育て方がよかったのだろう。

カルーアの気持ちも少し明るくなってきたようなので、ドクター・クリスは声をかけた。

「カルーア」

「はい」

「荷台に、水筒があるでしょう。胃袋の」

「あ、はい」

「喉が渴いたら飲んでください。なくなったら補充をお願いします」

今度はカルーアが

「今日はどこまで向かうんですか？」

と聞いた。

「今日の予定はロザムザです」

ロザムザとはレアレスの首都レストンの東に位置する都市だ。首都と隣り合っているだけ

あって、まだまだ開けている。

「もつと行けるんじゃないですか？」

「そうは思いませんよ。これから先、どんな障害が待ち受けているか分かりませんからね」

馬車は一定の道幅を必要とするため、通れる道も限られる。震災があつてからまだ数日しか経過していない今、広い道が都合よく開いているとも思えなかった。また、レアレス公国最大の都市であるレストンはかなり広い。

「焦つてもしょうがないです。ゆつくり確実にいきましよう」

カルーアはしばらくしてから

「はい」

と返事した。